

ある農家の盆行事

－ 都市への移住と伝統文化の継承 －

倉石 美都*

(e-mail : reportkochiradesu@gmail.com)

<目次>

- | | |
|--------------|----------------|
| 1. 問題の所在 | 3.4. 盆見舞い |
| 2. 家族構成と生活環境 | 3.5. お棚経 |
| 3. 盆の時期の暮らし | 3.6. お供え物 |
| 3.1. 盆だな | 4. 環境の変化と行事の変容 |
| 3.2. 盆の食事 | 5. 終わりに |
| 3.3. 迎え火・送り火 | |

キーワード：盆(Bon-Festival), 都市民俗(urban folklore), 伝統継承(traditional inheritance), 迎え火送り火(bonfire), 血縁集団(a kin group), 都市の年中行事(Annual function in the urban)

1. 問題の所在

一年の中の大きな行事の一つが盆である。夏休みを利用して帰省する人も多く、特に盆の時期に集中し、交通機関の乗車率などはニュースとなって報道される。しかし、同じ一年の大きな行事であり帰省ラッシュが起きる正月と比べて、あまり準備などに時間を割いていないのではないかと思われる盆である。おせち料理などの準備もなく、門松や飾り物の準備のための歳市のようなものがあるわけでもない。盆踊りなどの祭りが各自自治体で行われるが、そこに来店される屋台などは専門業者によるものが多く、自治体では管理をしているだけのようである。

* 경기대학교, 조교수, 한일민속학·문화인류학

盆踊りが自治体によっては行われるが、自治体として行われており、個人としてはその場へ行き、踊り、屋台で遊んで帰ってくるなどをするくらいである。しかし、このような行事は全国各地からの移住者が大部分を占める東京のような場所でのことだろう。出身地の多様な風習を東京に持ち込んでいる移住者たちは、いったいどのように盆を過ごしているのだろうか。また、その風習はどのように継承されているのだろうか。

以前、年越しを扱った拙稿¹⁾でも述べたが、都市は全国各地からの移住者が混在し、集住することによって成立している。各地の風習・習俗が持ち込まれ、その時代と場所の文化と混在し、また新しい形に変化したり、創出されたりしていく場所でもある。出身地の違う者同士が一つの場所に住み、それぞれの民俗文化を持ち寄り、時には混ぜ、時には反発しあいながら、都市ならではの民俗文化としてそこでの民俗文化を築いてきた。コミュニティーの中で新しい文化を創り出すこともあれば、各家庭の中で個人の民俗文化として継承してきたものもある。家族単位、個人単位、地域単位などさまざまな民俗文化が都市には存在しているはずであるが、いずれも出身地の生活環境や生活体験に基づくものであることに間違いはない。

しかし、そこで疑問となるのは、伝承母体を離れた文化はどれほど持ち込まれてくるかということである。都市に入ってきた時点で、どれほどの伝承文化をどのように都市に持ち込み、どれくらい伝承していくのか。これは現在の「東京の伝承文化」のあり方に関わってくる。都市の伝承文化をどのように把握するかという、都市民俗学的研究において基本となる問題である。また、村落の民俗文化の都市化の問題にもかかわってくる。

都市民俗研究において、都市への移住者がどのように伝承文化を生活環境の変化に応じて変えてきたかという研究は決して多くなく、未だに調査・研究の余地がある部分でもある。そこで、都市への移住者の実態報告として、今回、長野県長野市のある農家の伝承を取り上げる。都市の民俗、地方の民俗、といったことに関係なく、フィールドワークと聞き取りで研究が行われているため、文献資料

1) 倉石美都(2014)「ある農家の年越し—都市移住に伴う変化の様相—」『信濃』第66巻1号 信濃史学会

も参考とするが、1985年頃から2015年頃まで長野市から東京に移り住んだ家族を対象としてみていきたい。一つの家族の中で、長野市で行われていた時の伝承が、分家として東京に移住し、そこで家族それぞれに結婚、出産、同居などの変化が起きた時にどのような変化があったのか明らかにし、地方と都市における伝承文化の継承のあり方がどのように変わったか、みていくことにする。ここでは、「ある農家の年越し—都市移住に伴う変化の様相—」で扱ったのと同じ場所を取り上げ、そこでの盆の行事に焦点をあてる。

2. 家族構成と生活環境

事例の対象となる農家は、長野県長野市の東にある戸数四〇戸ほどのM集落のT家である。M集落は、専業農家を中心とし、米麦の二毛作と養蚕主体の近郊農村で、一九六〇年代まではわずかな兼業農家も含んでいた。マキといわれる同姓集団が複雑に入り組んでおり、冠婚葬祭の付き合いなども濃密だったことや、小さな集落であったこともあり、皆顔なじみであった。一九七〇年代に入ると、宅地化が進み、移住者も増え、農家も減り、付き合いも次第に疎遠になっていった。そんな中でも、T家は二〇数代続いた「旧家」とみなされている家であった。その家族構成は年代別に図に示してある。M集落に住んでいた一九六〇年代、東京に移住した一九八〇年代、東京都内で転居した二〇〇〇年代の三つの年代に分けた。これは、都市に移住する前と後、都市に移住してから家族構成が変化する前と後、に分けたため三つに分かれている。また、それぞれ一九六〇年代をA、都市移住後をB、都市移住後二〇〇〇年代をCと示すことにする。

一九六〇年代のAは敷地内に、母屋、離れ、土蔵（一部厩）、井戸、庭、屋敷神があった。一九八〇年代のBでは、東京都下、最寄り駅までは徒歩20分、住宅地の戸建てに暮らしていた。入居者たちの農地を継承して分譲した住宅地で、併せて、それぞれの家の大きさの家が並び、
は、敷地いっぱいに家屋が建っていたが、それぞれの趣向に合わせて小さな庭を

飾っていた。隣近所の付き合いはある程度あったが、交流は密接であるとはいえ、子供の学校行事や自治体の集まりがあるなど、お互いに顔を合わせることはあった。しかし、冠婚葬祭の折に互助活動をしたりすることはなく、M集落でのつきあいとはかなり違うものであった。

二〇〇〇年代にCのマンションに移住する。最寄駅から徒歩で5分ほど、駅前に大型スーパーや飲食店があり、AやBに比べると人が多く、にぎやかな場所であったが、庭はなく、その代わりに比較的広いバルコニーがあった。A、Bに比べると遊ぶ場所は減ったが、バルコニーで子供や小型犬が遊べるくらいの余裕があった。バルコニーから下の階の住人の様子がわかるなどしたが、Bよりもさらに隣近所の付き合いは希薄になり、エレベーターなどで顔をあわせれば挨拶したり、軽い世間話をする程度の付き合いで、冠婚葬祭での行き来などはまったくなかった。

住環境の変化と同様に、家族構成にも変化がみられる。Aでは四世代が同居している時期などがあったが、分家する時点では三世代六人家族であった。Bに分家してからは松本出身の⑨の母が同居し、三世代五人同居であった。しかし、一〇年ほどして長男が結婚したことにより、新しい家族構成員が加入した。しばらくして長女⑬が独立するために別居した。Cに転住した後にBで結婚した子供夫婦に子供が生まれたが、若夫婦と孫とは別居した。住環境の変化は、子供の成長とともに家族構成の変化をも伴っている。

こうした構成員の変化は、家庭で行われる行事に変化をもたらすと考えられる。では、どのような変化があったのか、盆の行事における様相を概観してみよう。

図1 Aの家系図

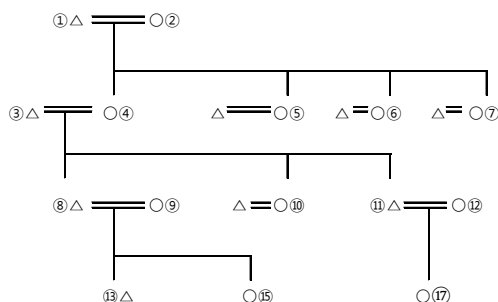


図2 Bの家系図

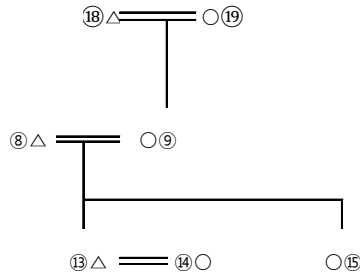
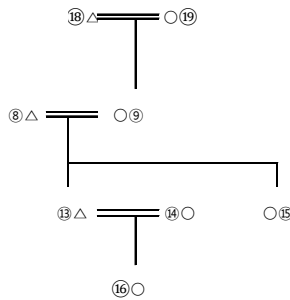


図3 Cの家系図



3. 盆の時期の暮らし

Mに住んでいた頃のT家では、専業農家というわけではなく、勤めに出る者もいたが田畑の仕事もしていた。そういった点からは、農作業の進み具合は季節を表し、季節とともにT家の生活のリズムがあった。盆の時期は養蚕をしているときには忙しかったが、一九六〇年代に養蚕を止めてからは比較的暇な時期であった。野菜の収穫期ではあっても、稲の収穫にはまだ間があった。したがって準備に時間をかけるつもりになれば、相応の時間を費やすことは可能であったが、新年を迎える年越しのように大掃除をしたり、買い物や食料品の準備などに何日も費やしたりするようなことはなかった。

M集落における盆は月遅れの八月に行われ、この月を盆月などとよんだ。盆月最初の一日はイシノトといい、地獄の釜の蓋が開いて仏様がそれぞれの家に帰るために出発するといわれた。一九四〇年代まではこの前日(七月三十一日)をウラボンといい、この地方の仏教の中心的な施設である善光寺に人々が仏様を迎えに行ったという。T家では善光寺に仏迎えに行ったことはないというが、新盆の家には一日になると隣近所や親戚の人などが、ロウソクや線香、スイカなどの果物や盆提灯を持ってお参りに訪れる。仏様を迎えるための盆が始まったのである。

墓掃除も一日か七日には行い、一〇日ごろには仏壇の仏具をきれいにするオミガキをする。一二日には善光寺門前の中央通りにお花市が立ち、近在の人々が盆用品や盆花を購う。T家でも、子どもたちは浴衣を着てお花市に行くのを楽しみにしていた。お花市では、迎え火や送り火にたくカンバ(ダケカンバの皮)や仏壇に供えるお花を対で買う。お花は、ススキ・ガマの穂・ハスの花・キキョウ・オミナエシなどが、束にして売られている。そして一三日が迎え盆である。

こうしてみても、年末年始の行事に比べてその儀礼は確かに少ない。だからといって何もなかったわけではない。家族がそれぞれの役割を持って盆を過ごした。どのような行事の時に、どのような役割を果たしていたのか、ABCの生活環境ごとに比較してみようと思う。

3.1. 盆だな

A: 盆に迎えた仏様(ご先祖さま)のために特別に祭壇を作り、これを盆だなと言ったが、浄土真宗のT家では特別に棚を作らなかった。平盆にナスやキュウリなど、家の畑で獲れた季節の野菜を載せる。さらに、⑧がキュウリとナスで作った馬を一つずつのせ、仏壇の前脇に供える。これは馬と牛であるともいうが、T家では馬だといっていた。この野菜で作った馬には、仏さまが載ったり荷物を乗せたりするといわれ、キュウリとナスに折った割りばしをそれぞれ四本刺して脚を作るが、かつてはススキの茎を脚にした。ナスの馬には、尻尾としてトウモロコシの毛を付けた。

仏壇の前には盆提灯を供える。普段の盆には一対、もしくは二対を供えていたが、新盆の時には隣近所や親戚などから贈られた盆提灯で部屋が盆提灯でいっぱい

いになる。また、新盆の時には軒先に提灯を吊るした。一九七一年に新しく建て直された家でも、新盆の時には軒先に提灯を吊るした。

B：⑨の母親との同居となり、⑨の実家が神道であったため、盆提灯は出して飾ったものの、盆だなを作ることはしなかった。

C：マンションに移ったからという理由よりも、Bの時点で盆だなを作ることを省略するようになり、Cになってからも特に何もしなかった。

3.2. 盆の食事

A：盆のご馳走として、丸ナスのオヤキとてんぷらを作った。てんぷらは十三日に、おやきは十四日に食べるご馳走として作られていた。十三日のてんぷらは午後三時ごろから揚げはじめ、二時間ほどかかる量を揚げた。夏に採れる野菜が中心で、ナス、ピーマン、シシトウ、シイタケ、チクワ、カボチャ、サツマイモなどを揚げたが、サツマイモがとれない時にはカボチャだけを使った。ナスは輪切りにし、間に味噌をはさんで揚げた。最後に衣があまりないように、タマネギでかき揚げを作った。

十四日の朝は、五時ごろからオヤキを作り始める。ご飯は炊かず、一日三食オヤキを食べていることもあった。子どもはオヤキが苦手なこともあったので、そういう場合はパンを食べるなどしていたが、大人たちはオヤキを食べる。

オヤキとは言うが、T家のオヤキは焼かず蒸かした柔らかいオヤキであった。丸ナスを輪切りにして切り込みを入れ、そこに甘味噌をはさみ、耳たぶくらいのやわらかさにこねた小麦粉で包んで蒸かした。盆のオヤキは丸ナスのオヤキが多かったが、小豆餡のアンコのオヤキも作った。アンコのオヤキの具の小豆餡は、十三日のうちに準備しておいた。ナスのオヤキはミョウガやササの葉に包んで、蒸かしに立てるようにして並べ、二十分ほど蒸かして作る。立てて蒸かすことができたので一回で二〇～三〇個ほど作ることができ、それを三～四回行った。具がアンコのオヤキは立てて蒸かすことができないので、蒸かしに並べると一回で入る数は二〇個ほどだった。それを二回ほど行った。全部で二〇〇個近いオヤキを作る。それを家族や親戚などと一緒に食べる。

十五日は朝はほぼ日ごろ食べている食事と同じものを食べたが、昼間はそうめ

んを作って食べた。このそうめんを、盆だなに飾ってあるキュウリとナスの馬の背につける。これは手綱であるとか、お土産を縛って帰るためのものであるなど、理由はさまざまである。

十六日になると盆だから特別にこれを食べる、といったようなものはなく、普段の食事であった。

儀礼食というほどのものではないが、普段は食べずに盆に食べるものとしてエゴがあった。海藻のエゴ海苔を溶かして固めたものであるが、T家で食べるようになったのは、③が婿入りしてからであった。③の実家で盆に作って食べていたので、③がT家に持ち込んだものである。T家のものは作り方を知らなかったので、③が直接作った。エゴ海苔を買ってきてゴミをとり、鍋に入れて溶かし、型に入れて固めて作った。天ぷらを揚げる前に溶かして型に入れておくと、天ぷらを揚げている間に冷えて固まり、天ぷらを揚げ終わるころちょうど食べごろになった。芥子を付けて酢醤油で食べる。寒天と同様のものであるが、色が黒く若干舌触りが荒い。初めて食べる家族には必ずしも好評ではなかったが、梅酢を入れるとまろやかになるなど、どこかから聞いてきたことを工夫しながら作っていた。

エゴと同様に③がT家に持ち込んだ食べ物に、ヤタラヅケとよぶ即席の漬物があった。手近にある野菜を、やたらに漬物にするからヤタラヅケと呼ぶのだといった。ナスやキュウリ、茗荷やキャベツなど、使い残りの野菜などを刻み、皿やドンブリに入れて、浸る程度の醤油を入れて、軽く重しをして一夜置くと食べごろになる。一回作ると二～三日食べることができたが、盆に作る料理というよりは、夏の食べ物の一つであった。

B：⑧が好んだこともあり、ナスのオヤキを作ることもあったが、Aで作っていた時とは、量も少なく一日三食オヤキを食べるといことはほとんどなかった。T家で作っていたような、盆の儀礼食を作ることはほとんどなくなった。

C：家族の年齢があがったこと、作る⑨の手間などから、オヤキを作ることはなくなった。盆であるからといって、特別な食物を作ることはなくなった。

3.3. 迎え火・送り火

A：十三日の夜に迎え火を、十六日の夜に送り火を焚いた。墓参りは主に⑧⑨

⑬⑮が行き、結婚するまでは⑩も行ってた。墓参りに行くときは、カンバと火を灯していないホウズキ提灯を持って行った。⑬⑮は浴衣を着、⑧⑨も浴衣を着ていくことがあった。この時、すれ違う人がいると「結構なお盆でございます。おめでとうございます」と挨拶した。新盆の時は「お寂しいお盆でございます。」と挨拶し、「おめでとうございます」とは言わない。また、⑬は中学に入ると家での迎え火・送り火はやったが、お墓まで行くことはなくなった。

T家の墓は塔頭の菩提寺の境内にあるので、まず本坊に挨拶に行き「結構なお盆でおめでとうございます」と挨拶する。新盆の時には「お寂しいお盆でございます」と挨拶する。本坊の方からも同様の挨拶を返してくる。一緒について行った小さな子供には、用意されていた菓子が手渡される。その菓子を楽しみについていく子供もいた。

菩提寺にも同様な挨拶をしてから、墓の前で迎え火を焚く。カンバに火をつけて、「じいさん ばあさん この明かりで おおいで おいで」と言って焚く。その火でホウズキ提灯のろうそくに火を灯して、その火の明かりで帰ってくる。お墓からかえるときには、ご先祖様を負ぶってくるといって、両手を背後に回して背負って来る格好をする人もいた。

家に着くと、仏壇のある座敷の前で、またカンバに火をつけて迎え火を焚く。この時にも「じいさん ばあさん この灯りで おおいで おいで」と唱えた。それから仏壇にお参りした後、家族そろって夕飯を食べた。

送り火は一六日に、まず家の座敷の前庭で焚く。この時には「じいさん ばあさん この灯りで お帰り お帰り」と唱える。それから墓へ行って、墓の前で焚く。この時にも「じいさん ばあさん この灯りで お帰り お帰り」と節をつけて唱えながら焚く。

なお、一九五〇年代までは、遊び火と言って一四日と一五日にも座敷前と墓前で火を焚いた。この時には「じいさん ばあさん この灯りで お遊び お遊び」と唱えた。家に帰ってきたご先祖様が、遊びに行く日だというのであった。どこに遊びに行くのだとは聞いていなかったが、街に遊びに行くのだと思っていたという。

B：東京に墓はなく、帰省ラッシュなどを避けるなどの理由からお盆に帰省し

なかった。そのため、墓参り自体をお盆の時期にしなかったのも、迎え火・送り火は焚かなかった。また、Bは新興住宅地であったため、それぞれが帰郷するなどしていたこともあり、迎え火・送り火を行っている家も周囲にはなかった。ただ神棚には、花束を対で買って来て供えた。

C：Bのような理由に加え、マンションという環境では迎え火・送り火をすること自体が難しかった。

3.4. 盆見舞い

A：盆月に入ると盆見舞いといって、親戚の人々が訪れた。普段の盆には①の弟、⑤⑥⑦、②の実家などが盆見舞いに訪れた。また、新盆にはこの他に近所、同姓、となり組、①②・③④の子分などが来た。子分とは、擬制親子関係の子に相当する人である。M集落などには、結婚を機に後見人として親分を依頼する風習があった。ムラの有力者に依頼することもあったが、本分家関係間や兄弟、あるいは仲人親が兼ねることも多かった。

B：盆の時期になると⑧⑨の知り合いや親せきなどが来たが、盆だからというよりは、盆休みを利用して遊びに来る、という感覚であった。盆見舞いとして来る人はいなかった。

C：Bとあまり変わらなかったが、⑬が⑭の実家へ行くようになった。

3.5. お棚経

A：盆月に入ると、菩提寺の僧や庵主さんが来て経をあげた。庵主さんは尼僧で、M集落にある天台宗の尼僧庵の庵主である。M集落内の各家の死者の月命日、あるいは祥月命日には、読経に訪れる。菩提寺の僧はもちろん檀家の死者の月命日・祥月命日に訪れる。

読経は宗教者がするだけではなく、家族も行った。盆の一三日から一六日まで、毎晩夕飯前には③が仏壇に向かって読経し、その後家族がお参りしてから食事をした。

③が仏壇に経をあげるのは、盆の時ばかりではない。大晦日や彼岸などにも経

をあげた。③の生家は婚家であるT家と宗派が異なっていたので、このような時に経をあげる習慣はなかったという。だが、一九四〇年代に入り、戦況が厳しくなる中で、必要を感じて経を読み覚えたという。⑧も③に言われて、一緒にあげることもあったという。

B：神道で祀っていたし、仏壇もなかったので、盆に経をあげるようなことはしなかった。

C：Bの時と同様に経はあげない。

3.6. お供え物

A：仏壇に花を供えるとともに、盆だなに訪問客からのお土産などを供える。毎朝、御膳様と言って仏器にご飯を盛り、お茶とともに供える。これは盆だからというわけではなく、毎朝おこなわれる。お花もできるだけ新しい花を供えることができるように、前栽畑の一角に花を作っていた。年間を通して花を切らさないように心がけるのは、女の年寄りの役目であった。

客のお土産はもちろん、他所の家からのもらい物や、ご馳走など変わり物を作った時には、まず仏壇に供えられた。

B：神棚に花を供える。訪問客のお土産や、もらい物も供える。花はいつでも花屋から買うことができるようになったので、花を切らすことを心配する必要はなくなった。

C：神棚に花を供える。訪問客のお土産や、もらい物も供える。花屋が近所に複数あったので、花に対する心配はあっそう少なくなった。

4. 環境の変化と行事の変容

長野市における農家 (A) から東京に移住したサラリーマンの家庭 (B) 、そして都内で転居し家族構成に変化のあったサラリーマンの家庭 (C) という、生活環境が三転したT家の盆の行事の概要をみてきた。T家という一家族を伝承の単位

とし、どのように伝承文化事象が継承されているか考察していこう。

T家はAからBへの移行により、③から⑧への世代交代が行われている。文化の伝承が上位世代から下位世代への伝達および下位世代の継承によって行われるとすれば、AからBに移行する際に、同じ事象がみられるとすれば、それはその事象が継承され、伝承されたと考えることができる。また、同じ事象であってもその形態や内容に変化が起きているなら、それは文化事象の変容である。行われなくなった文化事象があったとすれば、それは文化伝承の断絶と考えられる。変容の中には新しく行われるようになったものや、一世代おいてまた始められたものなども含まれる。

内容を整理すると表1「T家の盆」のようになる。こうしてみると、家族構成の変化と文化事象の変化とが大きく関係していることがわかる。つまり、文化の伝承および継承には、家族の考え方が大きな原因となっており、伝承単位としての家族構成員によって左右されているのである。

AからBに移った際の大きな変化の一つは、⑨の母親である⑬との同居が始まったことである。T家はM集落だが⑨の里は松本であり、異なる文化の流入による伝承文化への影響がみられる。また、⑨が就職したこと、⑬、⑭も成人したことなどによって、家庭における行事への参加の頻度も減り、継承の機会も減少することになった。

変化の次の要因は、生活環境の変化である。その最も大きな原因は、墓が近くに無くなったことである。Bにおいては一戸建てだったため、門口で迎え火・送り火を焚こうと思えばできないわけではなかった。しかし、先祖に対する迎え火・送り火は、墓前と門口の双方で焚くことになっている。迎え火・送り火を焚くために、その都度車で三時間かかる郷里の墓に行くことは困難であった。その結果、結局行われなくなってしまった。

Cのマンションに転居してからは、たとえ墓が近くにあったとしても門口で火を焚くことはできない。いくら文化を継承する気持ちがあったとしても、物理的にできない原因があった。

AからBに移った際のもう一つの大きな変化は、盆の料理に関してである。Aでは同じ文化圏内に生活する訪問客が多かったためふるまえた料理も、BやCに移ってからは、都市という性格上M集落以外の出身者が訪問してくることの方が自然と多くなる。すると、M集落では当然だった盆のごちそうも、当然のものではな

くなる。食べる人数と作る手間を考え、作らなくなるという選択がとられるというようにも起きる。

ただ、⑧は夏の料理としてオヤキやそうめんなどを求めることがあり、その際には盆と関係なく⑨は作っている。儀礼食が日常食に転化してしまったのである。

生活環境に伴う家族構成員の変化が、文化事象の伝承に影響を及ぼすこともある。例えば盆棚に供える、キュウリとナスの馬の作り方の伝承である。⑧は③から詳しく教わったわけではないが、見よう見まねで作ることを覚えたという。子どもは親の仕事を手伝う程度の役割しか担わないが、次の伝承の継承者として行事に参加している。しかし、Cでは⑬が結婚をし⑭が生まれ新しい家族構成員となっているが、迎え火・送り火などを見る機会も参加する機会もなく、継承が難しかった。また、⑭はM集落の近くの出身であるがT家の文化の継承に積極的ではなく、盆の頃に里帰りをするため、⑨の料理や⑯の文化などもみる機会をあまり作ることもなかった。⑭の両親は長野の出身でないためM集落の文化にも馴染みがなく、なかなか受け入れるのが難しい部分があったようである。⑭は「お正月のお節料理はいつも‘モツ鍋’です。長野でやるようなお年取りの食事は作ったことも、食べたこともありません。お正月になってからお節を食べます。12月31日は家族みんなで‘モツ鍋’が実家の年越しの料理です。」といい、「お盆は特に作るものもないし、北海道が田舎だったのでお墓参りもあまりしたことないです。お盆の時に、焼肉をしたりして家族やいとこたちと食べました。そうめんは普段の日の昼食では食べますけど。お盆も実家に一週間ほど帰ります。おやきも作り方がわからないので、作ったことはないですし、スーパーで売っていたので、買ってきて食べただけで、作ったことはありません。」という、T家とは異なった盆や年末年始の過ごし方をしていたことから、M集落のT家の文化には違和感を覚えていたようである。

このように、継承されない文化には物理的な理由と、継承者の文化伝承への意識の違いによるものの二つがみられる。初めはM集落の文化を継承しようとしていても、徐々に都市での生活と折り合いをつけながら、やめていく事象もあり、M集落での文化をそのまま継承していくことが難しいことがわかる。

表1 行事の分担

月日	行事	事象	担当者		
			A	B	C
12日	お花市	カンパ・花を買う	⑧⑨⑬⑮	⑨	⑨
	掃除	仏具みがき	④⑬⑮		
13日	盆だな	馬・牛作り	⑧		
	盆提灯		③⑧	⑨	⑨
	お供え		④⑨⑰	⑨⑰	⑨
	盆料理	てんぷら造り	④⑨	⑨	
		エゴ	③		
	墓参り	迎え火	⑧⑨⑬⑮		
14日	盆料理	おやき	④⑨⑬⑮	⑨	
15日	盆料理	そうめん	④⑨	⑨	⑨
16日	墓参り	送り火	⑧⑨⑬⑮		

5. 終わりに

以上、盆行事の伝承形態の一例を概観してみた。一家族の環境の変化に伴う伝承の様態を見ただけではあるが、たとえ文化を継承していく意思があったとしても、居住環境による物理的な理由でできなかつたり、新しい構成員の意識が違うことで継承できなかつたりする文化事象を見出すことができた。物理的な理由で継承が難しいのは都市という生活環境・居住環境の変化に伴うものであったが、新しい構成員の意識の違いは居住環境とは関係ない。特に⑭はM集落周辺の出身にも関わらず、あまりM集落の文化に理解を示さず、⑯が誕生してからもT家の文化を継承させることに積極的ではなかった。

こうした点から農村(地方)から都市への移住に伴って引き起こされる伝承文化の変化は、生活環境の変化に伴い伝承事象を実施できなかつたり、下位世代が継承しなかつたりして、結局伝承事象が消滅してしまう傾向が強い。それは社会的

な環境の変化をも伴うため、地域集団や社会集団とともにあった伝承事象が、そうしたものから切り離された一家族の伝承としてしか存在できなくなってしまうこととも無縁ではない。伝承の単位が小さくなってしまい、伝承エネルギーが衰弱してしまっているのである。

また伝承が地縁・血縁集団と結びついていた農村と、職縁や諸縁ごとに分断された都市とでは伝承単位が全く異なってしまうことも無視できない。伝承(伝達・継承)が、家族の構成員の意識に大きく左右されているのも、まさに都市ならではの現象であろう。地縁・血縁集団の伝承文化に対する規制力が、都市においては働かないのである。

盆という先祖のまつりは、イエという先祖からこれから生まれてくる子孫までも含む観念的な血縁集団の儀礼である。そして家はムラという地域集団の構成単位であり、いずれにしても村の生活を基盤とした儀礼でもある。そうした文化基盤のもとに伝承されてきた文化事象が、まったく異なる都市文化の中で伝承されるとしたら、かなり異なる性格のものにならざるを得ないであろう。

その都市の盆儀礼の在り方を明らかにするためには、異なる形態の家族を対象として、さらに詳細な分析を行わなければならない。しかしその都市の盆儀礼の伝承文化事例の片鱗が見いだせなかったわけではない。一家族の中の事例ではあるが、その都市での伝承文化の事例として挙げられるのが盆の儀礼食の日常食化であり、商品化の拡大である。様々な文化が混在している都市では、ある一地域の儀礼食として認識することは、共通認識としては難しく、おやきやそうめんのようにある一定の儀礼に食べるものだという意識が薄れているが、まったく食べなくなるのではなく、ふとしたときに思い出して食べるような日常の中での食事に変化している。

それが具体的にどのように都市の盆行事にかかわってくるのか、もしくはまったく別の存在になってしまうのかは、今後の問題とせざるを得ないが、現在はつきりといえるのは、大きな括りとして‘盆’という行事は共通認識として都市でも存在しており、‘盆’行事が行われているから大きな枠組みのなかでそれぞれの‘盆’を続けることが可能であるが、その中の細かい地方性については大きな共通認識で動いている都市の儀礼の中では継承が難しい。

しかしだからといって伝承文化としての盆行事は、都市の中で全く消滅してしまうとは思われない。規模を小さくしたり、あるいは変容したりして継承されているからである。核家族化が進んでも、逆に田舎に興味をもってIターン、Uターンをする若者家族がおり、そうした若者が新しい文化の担い手になっていたり、都市で継承していこうという中心的役割を担い始め、新しい都市の盆行事のあり方や継承方法を模索し、続けていこうという意識をもって‘盆’を行っている自治体もちらほら見つけるからである。それは都市が村と全く無関係な存在ではなく、場所を都市に移しても、今年もまた村の盆行事に参加し、その伝承の一角を担おうとする多く人々の意識が、都市からムラに向かっているからだと考えられる。都市だからといって伝承が消えるのではなく、新しい文化として新しい伝承が生まれているのも事実なのである。

【参考文献】

- 倉石美都(2014)「ある農家の年越し—都市移住に伴う変化の様相—」『信濃』第 66 卷 1 号 信濃史学会, pp.41-57
- 阿南透 (1997) 「伝統的な祭り新たな祭りの創造」小松和彦編『祭りイベント』小学館
- 倉石あつ子(2011)「祭り一家族の分化と祭の変容と—」『人文学フォーラム』9号
- 宮田昇(2006)『都市の民俗学』吉川弘文館
- 新谷尚紀・岩本通弥(2006)『都市の暮らしの民俗学』吉川弘文館
- 倉石忠彦(1997)『民俗都市の人々』吉川弘文館
- 倉石忠彦(1990)『都市民俗論序説』雄山閣出版
- 岩本通弥・倉石忠彦・小林忠雄編(1989)『都市民俗学へのいざない』雄山閣出版
- 湯川洋司(1991)『変容する山村—民俗再考』日本エディタースクール出版部
- 田中宣一(1992)『年中行事の研究』桜楓社
- 宮田登・萩原秀三郎(1980)『催事百話—ムラとイエの年中行事』ぎょうせい
- 石井研士(1994)『都市の年中行事—変容する日本人の心性』春秋社
- 外立ますみ(2003)「販売するモノから見る現代の年中行事」『民具研究』一二七
- 長野県史(1984) 民俗編 第四卷(一)北信地方 日々の生活 長野県史刊行会
- 長野県史(1985) 民俗編 第四卷(二)北信地方 仕事と行事 長野県史刊行会

논문 투고 일자 : 2018. 06. 26. 논문 심사 일자 : 2018. 07. 31. 게재 확정 일자 : 2018. 08. 03.
--

<要旨>

ある農家の盆行事
- 都市への移住と伝統文化の継承 -

倉石美都

現在、日本ではIターン、Uターンなどで都市以外への移住を促す動きがみられるが、まだまだ地方から都市へ移住する人は多く、さまざまな地域の出身者が集まって暮らしている。そこでは「都市」ならではの文化が生まれている。その「都市」の文化は、さまざまな地域の伝承文化が混在しており、それを都市化しているという者もあるが、都市で暮らす移住者たちによって変化されているものである。では、その文化の伝承はどれくらい持ち込まれ、継承されていくのだろうか。本論文では長野県長野市M集落のT家の盆の行事をとりあげる。T家は東京に移住したが、その移住前と移住後の盆の行事の行われ方、構成員の働きなどを比較していく。

都市民俗研究において、都市への移住者がどのように伝承文化を生活環境の変化に応じて変えてきたかという研究は、これまでさほどされてきていない。そこで、一つの行事に着目し、その中で家族構成員それぞれの役割や行事に対する意識の変化など、実態報告をするとともに、都市での伝承文化のあり方を明らかにしていく。

BON Festival of a certain farmhouse
- Moving to the city and preserving traditional culture -

Kuraishi, Mito

Currently in Japan, there is strong encouragement from the government for people to move to the countryside, including the depopulated areas far from the city. However, there are still are many people who want to move to the cities, especially Tokyo, where diverse people gather and live. Most new cultural developments begin in “the cities,” where city culture is intermixed with various traditional cultures, urbanization, and urban folklore. City culture is changed by people living in the city and new city culture comes from people with a range of various traditional cultural backgrounds, but until now it has been unclear how much they have brought and preserved of their own cultures. This paper studies a family (the T family) from M village in Nagano and compares what and how much changed in the way they celebrated their Bon Festival after they moved to Tokyo. It also compares the role of the family during Bon. In studies of city folklore, not much research has focused on how country people moving to the city changes their traditional cultures due to a change in living environment. For this study, I focused on one event and reported each family member’s actual situation before and after moving, including the family’s change in consciousness of their roles.